

が話をしました。正確な思いやりのある受け止め方ではなかったような気がしました。

私は終戦二年後の昭和二十二年七月十六日、故郷に復員しました。戦地へ行った時の輸送船では任地まで約一カ月かかったのです。それは魚雷を避けるため船が蛇行していったからでしょうが、帰りはたった十一日間で佐世保港に着きました。

こうして半世紀も過ぎても当時のことを述べ記せることは有り難くもあり、生と死の間を彷徨い、忘れようとしても忘却することはできない心の傷が哀れです。

私たち「埼玉是空会」四〇〇人の会員は、秩父三十四番さんのご宝前の大香炉の屋根の下に全員の名があります。四国へ行くと飛行隊殉難の方々の不動明王が祀ってあります。同じ国難に赴いた仲間として合掌してきました。

我々は戦没者の御冥福を祈り、体の続く限り慰霊のため志を立て、二十年間霊場詣りをいたしています。私たちは堂々と日章旗を立て、日本人らしく胸を張っ

て生きようではありませんか。「人老いるを怖れず、ただ心の老いるを怖る」と我が師は仰せられた。観世音菩薩に護られ、秩父、坂東、西国、四国、そして四国はお礼参りと二回詣らせていただきました。誠に有り難い限りで、私なりに一生懸命神仏におすがりしながら強い信念で、老後を楽しく、平和な日本を楽しく生きさせていただけこうと思っております。

### 玉砕の島サイパン

帰ってきた英霊

岐阜県 長瀬 一郎

幾たびか 戦友を呼べども 答えなく

只潮騒の音が悲しき

国のため 遠き南のサイパンに

玉と砕けし 御霊安かれ

この和歌は、私がサイパンを訪れた慰霊祭で詠んだものです。

私は大正十年八月五日、岐阜県高山市松本町一三九（現在三六七一五）で、自作農の七人兄弟の長男として生まれました。昭和十六年徴集で、昭和十六年五月五日、高山公会堂で兵隊検査を受けましたが、右眼は全然見えず〇・二、左は一・五のため第二乙種でした。検査を受けた者は三〇〇四〇人くらい。ところが同級生で同姓同名の長瀬一郎がおり、執行官は「長瀬一郎」の名を呼んだら二人並んだ。執行官はいぶかったのですが、生年月日も一週間しか違わないのです。

召集は、昭和十七年五月五日、名古屋の第二部隊鈴木隊第三中隊に入隊しました。夜間演習の匍匐練習で手を傷つけ腫れてしまい、一時召集が解除されました。第二回目は徴用召集で岐阜の川崎工場へ、飛行機の組立てでした。

次の召集は一年十ヵ月後の昭和十九年三月十八日、サイパン島行きの召集で、名古屋の第二部隊です。ここでは筏を組んだり、物資を積み込んだりの訓練でしたが、そのときはどこへ行くのか全然分かりませんが、半袖、半ズボンの夏衣で、帽子の後ろには日除けがあ

り、これは「南方だな」と想像していました。

船は一万トンに切れるというが、大きな船「東山丸」でした。五月十日未明、横浜港を出航しましたが、船内は蚕棚のように仕切られています。五月十四日、千葉県館山港で輸送船三、護衛艦七隻の船団を組みました。快晴でしたが夕方振り返って見たら、ただ富士山が盆の糸尻のごとく赤く見え「これが日本の見納めか」と寂として声なしでありました。敵前上陸の訓練はしていましたが、五月十九日サイパン島に上陸をしました。

揚陸は二日間かかり、糧秣、弾薬等を海岸へ野積みで、バナナや椰子の葉で隠していました。五月二十八日、軍機が偵察に来て爆弾を投下しましたが、海へ落ちて被害はありませんでした。

私は隊を離れて本部付衛生兵となり、上官は大場大尉のみ覚えています。本部の位置はガラパンのタッポーチョ（標高四〇〇メートル）というサイパン島で一番高い山にあります。島は丘陵が多く、海岸に若干平地があり、水源地はタッポーチョ北側で水はチョロチョ

口流れている。サイパン島の北側は絶壁で、良い港のある方は大体平地でした。

私は衛生兵教育を昭和十七年五月から八月まで四月間受けていました。私は右眼は駄目だが左眼は大丈夫であり、体も身長一六五センチ、体重六〇キロだから一般の者に負けないし、走るのも早かったから兵科の現役兵並みの体格、体力をもっていました。

六月十一日、米軍の艦砲射撃があり、後に空襲で、タッポーチョの山頂から海に向け銃・爆撃です。艦砲は横から着盤の目のように正確に撃ってくるが、幸いに私には当たらなかったが、他の戦友は死んでいった者が多かったのです。

二日後、上陸用舟艇が押し寄せて来ました。島には二八センチ級の要塞重砲があったが陣地構築中で使えません。野・山砲と高射砲を水平にして上陸用舟艇へ平射する。百発百中、甲板の敵のやられるのがよく見えます。

三回くらい押し寄せて来るうち、こちらの砲弾もだんだんと底をついてくるし、敵は上陸用舟艇の間に艦

砲射撃をする。こちらの集積した弾丸が誘発していったので、その味方の弾がどこへ飛んで行くか分からない。そのうち我が軍の油のタンクが爆発し燃え広がる。敵のグラマン戦闘機の攻撃で日本軍の飛行機はやられて全滅しました。四〇五日目ごろまでは友軍機が空中戦をするのだが、衆寡敵せずというのか、性能の差か、だんだんと戦力が低下し、ついには墜ちて行くのは日の丸の友軍機のみとなる。飛行士が白いハンカチを振りながら海へと墜ちていく。それを見る我々の口惜しさ飛行士の悲壮さ、何とも言えぬ様子でありました。米軍機は火力に勝り、機数が違う。二〇〇〜三〇〇機編隊で襲撃するのだから、ついに制空権は完全に米軍の独占となってしまいました。

島の方は、阿鼻叫喚の生き地獄でした。戦友はどんなやられ、我が軍の指揮系統は皆無になりました。夜間は照明弾を打ち上げるが落下傘式で、十五分間くらい空から照らして、昼間のように来て襲しても発見され皆殺しとなるのです。我が軍の電波は敵に逆探され、そこへ砲弾や銃弾が撃ち込まれる。無線連絡もで

まず、外部との通信は不能になる。指揮命令はできなくなり、個人や小集団のみ個々に判断しながら戦い、あるいは退避するより仕方なくなりました。

食料は煮炊きすると煙が出てやられる。夜中も照明弾で隠すことができません。余程深い穴でないといは使えません。従って生物や椰子の水、コプラ、バナナ、ドリアンなどの実や、ヒキガエル、かたつむり、焼いたパンの実などで飢えをしのいでいました。

いよいよ、部隊はバラバラになり、三三五五、逃走して行きます。手榴弾一個は自決用に持っていました。が、ほとんどが短剣のみですが刀身が錆びて抜けない。車も錆びたり腐蝕し使えない。糧秣は缶詰が主で、それで生き残っていたのですが、その後は米軍の糧秣を取り、それを分けてもらって飢えをしのぐ。水は泉のみ、他はスコールのとき飯盒や鉄兜を受けて飲みました。

六月を過ぎたらスコールがなくなりました。島民は雨樋から貯水槽に受けてそれを飲むのだが、中にはポーフラがわいていて、アメーバ赤痢になる。しかし、薬

は無い。またマラリアが多く、重症になると、便のタレ流しと発熱でどうしようもない。野戦病院もバナナの葉を土の上に敷いてあるだけです。

米軍が上陸して掃討戦で火焰放射機でやられたのだが、米軍上陸前の火焰地獄の話をしませぬ。

サイパン空襲前の五月、静岡の部隊の船が海没して、下半身は海の中に浸っているが、船の重油が海上を火の海にしているので顔は油で焼け付いているし、海から引き揚げて救助しても命は助けることはできないのでした。

米軍の火焰放射機でパイヤも椰子も甘藷なども、天然の食物はやられて食べる物が無い。日中の温度は三〇度以上で、負傷や疲労や病気で斃れる者が続出しました。タッポーチヨ山の北側に最後の野戦病院を作って戦友たちが収容されました。

そこには岩佐軍医がおられました。医薬品はなく、私が山の麓へ飯盒を持って水を汲むために下りて行きました。その間に野戦病院の位置を敵観測機が偵察し、軍艦の無線で知らせたのでしよう。病院は艦砲射撃で全

滅してしまっていました。私が病院へ水を持って登って見たとき、その状況は厳しいものでした。戦後の話ですが、遺骨収集のとき、その場所に飯盒があり、それには岩佐茂と彫記されていたのです。まことに奇しくも同郷の岩佐軍医の飯盒でした。

私は病院の者たちが全滅してしまいましたので、そこで自決しようとしたが、まだ友軍が来ると（日本の援軍―連合艦隊―が逆上陸して援助に来る）、皆信じていたので、通信塔のある電信山へ避難したら、迫撃砲の攻撃で、首の無い者、両手や足の無い戦友ばかりでした。周囲には兵器や軍刀など散乱しており、だれもいなくなっていた。私はここでも九死に一生を得たわけで、ただ茫然とし、夜中で私はどうしていたのか記憶がなくなりまだに不明です。

朝明けたら、皆重なりあって息絶えている。そのうち、渡辺一等兵と私と二人きりで、しかも二人共衰弱しきっていたので、せめて海の水でも飲もうとし、這って行ったら、米軍のジープが来て銃で囲まれ、帯剣と手榴弾を取られました。海の水を腹いっぱい飲みま

した。その日は昭和十九年七月十五日でありました。帰国して分かったが、私は七月十八日戦死となっています。その日は、サイパン最後の攻撃の時で、斉藤中将が亡くなったのはその前であったかもしれません。

我々二人は自決することも抵抗する力も兵器もなく、ガラパン港のすぐ脇の幕舎に收容され、そこには約百人ぐらいの日本人が收容されていたと思います。日本の負傷兵は米兵と一緒に治療を受けていました。給与の食糧は米兵と同じもの、デザートやココアも支給されました。私は暑さと空腹で大分衰弱していましたが、收容中にだんだんと体力は回復していきました。

同じ捕虜仲間、この幕舎から逃亡しようと血氣盛んな者が集まって、今に友軍が助けに来ると待ちました。周囲は皆米軍だったのでどうしようもありません。捕虜の待遇はベリーグッドだったし、看護婦や米軍の上官の我々に接する態度は紳士的でした。「日本ではお前たちはもうお墓に納まっているかもしれないが、日本に帰って復興せよ」と言う、米軍のハーゲッ大尉で温厚な人でした。

日課は、朝起き、体温計で口中の体温を計り、少しでも熱のある者は治療される。タバコが欲しいと言うと新しい箱でよこし、好きなだけ取れという。

七月二十八日、サイパン出航、八月三日パラオ寄港

八月十五日ハワイ、オアフ島着、九月二十六日オアフ島出航、十月二日米加国境通過シャツル着、防疫所で毛は全部剃られて消毒、衣服は大きいので熱気消毒、乾燥、その服を着て、信玄袋のような布袋を持ち、ロッキーマウンテンを越え、十月六日サンフランシスコのエンゼル島という小さな島に収容されました。

そこには日本とイタリヤの捕虜が収容されていた。生まれてから現在までの身元調査、内地の軍隊でのこと、サイパンで何をしていたかなど、二世の大尉に調べられました。十二月五日ですが、その二カ月間は作業はありません。

十二月五日、エンゼル島を出発、サンフランシスコ市街を通り、大陸横断鉄道に乗車、五・六両連結の客車で、各車両間には着剣した監視兵がおりました。日本の鉄道と違い広軌鉄道で、前の車に鐘を付け、カラ

ンカランと鳴らして走ります。列車に乗ったまま、ウイスコンシン州のマッコイ（五大湖の直ぐ脇）に到着しました。

そこには、昭和二十年十月二十九日まで滞在。その間、月々金曜日はまる一日、土曜日は半日の軽作業や兵舎の清掃に従事したり、山火事を防ぐために伐採した樹木の後片付けや、民間人の庭の草刈り、ペンキの塗りかえ作業を実施しました。しかし、国際条約により軍に関係した作業はさせられませんでした。収容所には日本人のあらゆる職業の人がおり、月に二回ほど芝居をやる。私は女形で、番場の忠太郎の母親役をやるなど、故郷を偲びながらの時間も過ごせたのでした。昭和二十年八月十五日、機関車の前に、米・日の旗を交叉し列車が走る。日本が負けたのでなく講和したのだと、我々には言ってくれました。また、フィリピンが米国に奪還されて食料の値が下がったなど話を聞きました。

二十年十月二十九日、マッコイの町を出発、汽車の旅を外を眺めると、我々の列車に手を振っている住民

もおり、何か団体旅行をしているように錯覚することもありました。十一月十一日、カリフォルニア州のッキー着、平坦地で油田も見える。メキシコ湾に近く、オリンピックのあったアトランタに近い所です。電柱くらいの大きいサボテンが赤や黄色の花を咲かせています。竜巻で我々は、鉄道線路の除砂をして汽車を走らせることもありました。羊の一団が線路を横断するので十分も待たされることもあり、日本では考えられない汽車の旅でした。

ミシシッピー川を渡り、北上し、カリフォルニア州のッキーに着く。十一月十一日から、翌年一月六日まで、一日に二百キロの綿花を袋に入れる作業が我々のノルマでした。私は、米兵や捕虜の炊事用の薪割り作業に従事しました。

一月六日、ッキー発、一月八日、ロサンゼルス着。一月十四日、ハワイのホノルル着。十カ月間ホノルル滞在。その間、草刈り、兵舎清掃等の軽作業でしたが、帰国までに、事故で死んだり、番兵の銃の暴発で死んだ者、首を吊っての自殺者、ノイローゼにかかった者

も二、三人はおりました。

その間、将校幕舎はノー作業。我々には給与も軍票で支給する。酒保もありアルコールもありました。民間人との交流、民間人の家での作業中話をしたり、手真似、足真似、ジェスチャーもどきでの交流ですが大部分は英語が分かりません。しかし、米人特に黒人は友好的でした。「私と貴方は同じだ」。「黒い黒いとさげすまれている」とのことです。私は故郷の高山で「文化連盟」に入って、芝居や舞踊をした経験があったので、芸を、時々米兵に見せたので「ハンドレッドボーイ」と米軍には人気がありました。芸が身を助けるとは予想もませんでした。

十一月十四日、日本の貨物船でホノルル発、十二月二十日浦賀入港、入国手続をして十二月八日の夜、こっそりと家に帰りました。

仏壇には遺骨箱があり、「故陸軍衛生上等兵長瀬一郎」と書いてありました。役場の遺骨箱を返しに行ったら職員が「戦争ポケ」が来たとささやいていました。そこで理由を話し、ようやく理解してもらいました。

私の位牌は今でも本願寺高山別院裏の英芳寺に置いてあります。

家では当然死んだと思っていた。二三日後の新聞に「幽霊帰る」の記事が掲載されました。四十日間くらい、手紙が来たり話に来たりで、その対応をしていました。身近の戦没者宅には自転車で回りお詣りに行きました。軍医の岩佐先生のお宅へ行き、お父さんにもお会いし喜ばれました。

戦争は負け戦をしてはいけません。サイパンの衛生兵は特につらかった。衛生兵や軍医は命の綱だから。私は九死に一生を得て帰ったのだが、父は明治二十六年生まれで上等兵でしたので、私が大東亜戦争で出征したとき「散兵戦では一番先に出る、一番目だと撃たれる」と教えられました。私はその教えのため助かりました。サイパンの戦場では凹地にいたとき、だれかが撃つたため戦車が来てバリバリ撃ってきた。三〇四〇メートル走ったら弾が飛んでくる。後からの弾は大変恐ろしいものと、今でも思い出され忘れることができません。

## 【解説】

自ら帰ってきた英霊と言う長瀬氏の聴取の中にある、岩佐軍医令弟の手記などを中心に、改めてサイパン玉砕と戦後の遺骨収集などにつき解説をします。

昭和十九年七月の読売新聞の記事の見出しに、『壮・最後の攻撃旬日。敵に大損害を與ふ。』

戦い得る在留邦日も運命を共に。

「サイパン将兵全員戦死す」。

傷兵三千は自決し、決死隊敵陣へ』

この新聞の写真は、岩佐軍医の令弟清氏が「サイパン島玉砕五十回慰霊祭」の冊子より抜粋したもので、往時をまざまざと偲ぶことができた。この記事等を含めサイパン戦と御遺族、生還者の証言を通じ解説をする。

- 一、戦闘経過の概要、昭和十九年六月十一日、サイパン島守備隊の主力である第四三師団（岐阜歩兵第一三六連隊、名古屋第一三五連隊、静岡第一一八連隊）が昭和十九年五月十九日上陸後の一カ月も経たないこの日、米軍の大空襲。

六月十二日 四八〇機の高空襲。十三日 戦艦八隻他により七時間に亘る艦砲射撃。十五日 上陸開始。二十二日 第一三六連隊チャチャ付近に後退。二十五日 タップーチヨ山占領。二十六日 ドンニイ陸軍野戦病院閉鎖。三十日 野戦病院で二千名余自決。

七月六日 南雲司令官、斎藤師団長他自決。七日 残存陸海軍將兵約五千名最後の総攻撃、全員玉砕。七月十八日 サイパン島玉砕が大本営発表により報道された。

二、サイパン部隊、兵力、戦没者、復員者一覽

1. 日本陸海軍部隊総数 四五、三二一名  
     戦没者数 四三、二七四名  
     復員者数 二、〇四九名
2. 日米戦没者数  
     日本軍 四三、二七四名  
     在留邦人 約一〇、〇〇〇名以上  
     米軍 約一五、〇〇〇名

3. 第四三師団関係

- 司令部 二五三名(内復員者 四名)
- 一三六連隊 四、〇四八名(同 一二九名)
- 一三五連隊 三、一〇三名(同 一七三名)
- 一一八連隊 三、二七三名(同 八二名)
- 野戦病院 六一三名(同 一四名)
- 經理勤務隊 二、六〇七名(同 八〇名)
- 通信・輜重隊他 四二三名(同 二三名)
4. 日本戦力比

兵力	日	四五、三二二名	米	七一、〇三四名
火砲	日	五一門	米	七三四門
射速砲	日	二四門	米	二一〇門
バズーカ砲	日	〇	米	一、六七四
大隊砲他	日	五四門	米	一六二門
迫撃砲	日	三〇門	米	一三五門
高射砲	日	四四門	米	多数
戦車	日	四九両	米	一五〇両
艦砲射撃の総弾数		約二〇万発		

(二万二千トン)と推定

長瀬一郎氏は、野戦病院生き残りである。

(高山市医師会報 一九八二年八月二十五日)

三十八年ぶりに遺品帰る―岩佐清より抜粋

『昭和十九年七月十日払暁、父(当時五歳)は玄関先の大戸をどんだん叩く音を聞き、その音に目を覚まして飛び起き大戸を開けますと、人影もなく真夏の朝の太陽が燦々と輝いていました。不審に思い乍ら寢床に戻り暫くすると、また大戸を叩く音がし、再び玄関に出ますと先刻と同じ人影のない静寂な朝だったので。その朝から八日後の七月十八日、サイパン玉砕の大本営発表がありました。

父は兄(当時二十八歳の)サイパン行きを知っており、息子はなんの挨拶もなしにあの世に旅立つ筈がない、靈魂が高山に帰りたいの一念であのように大戸を叩いたとして、七月十日を祥月命日と致しました。

七月九日母と共に市役所を訪れ、市長から遺品の飯盒を受け取りました。飯盒は厚手の白い紙に包まれており、悲喜交々の複雑な思いで開けたところ、将校用

のアルミ製蓋付きで、高さ一〇センチ、長さ一七・五センチ、幅一一センチ、錆び付いて蓋は開かず、その横側に子供の頃から見覚えのある堅い字画で「岩佐茂」と漢字で刻まれていました。角は腐食して穴があき、一部はポロポロで三十八年という歳月を感じさせました。

母は涙あふれる目頭を押えて「本当によく帰ってきた、帰りがかったんやなあ」と絶句し、飯盒を持った私の手はふるえ、冥黙しひたすら靈安らかなれと祈るだけでした。

帰宅して父の靈前に飯盒を供え、兄の見習士官の軍服姿の遺影を見つめていますと、三十八年前の出征当日の思い出がつい昨日のこのように思い出されました。……

昭和五十三年二月次兄と共にサイパン島を訪れました。二月出発前にして、サイパンの生き地獄から九死に一生を得て生還された長瀬一郎氏から全く奇跡的な野戦病院における兄との出会いの話を聞きました。

野戦病院は島の海岸近くにあったが、六月十五日米

軍上陸後は戦況不利で、十八日ドンニイ地区に後退。

この地区は四季を通じて水の湧くサイパン唯一ともいえる水源地があり、病院も岩山に囲まれ、真ん中に沢が流れ、洞窟が病室になり、約三千名の傷病兵が十分な治療も受けられないまま暮らしていた。

ある洞窟で長瀬氏は衛生兵として看護に従事しており、高山弁の氏の会話を耳にした兄は「お前はどこの生まれか」との問いが切っ掛けで同郷だと判明したと言われる。

洞窟内で三〜四日行動を共にしたが、長瀬氏は後方転戦を命ぜられ、別れの時に兄は抗戦不能の傷病兵全員に手榴弾を渡し、「自決後に後を追う」と語ったと言われた。

後日、ドンニイ地区は米軍の物量にものを言わせた攻撃で壊滅的打撃を受け、この地区が兄の最期の地であつただろうと涙ながらに説明されました。

ドンニイの洞窟は、入口近辺は密林のため昼なお暗く、洞窟内は三十余年の歳月で土砂くずれも著しく、奥行き二〇メートル、幅一〇メートルくらいの大きさ

でした。

砂の上に遺影写真を立て、高山からの水、みたらし団子、みかんなどを供えて霊を慰め、洞窟内の石灰岩石数個を遺骨の代わりとして拾いました』と書かれている。

サイパン島では昭和二十八年から昭和五十四年まで、十回にわたり政府派遺団による遺骨収集が行われ、二一、三六六体と報告されている。五十年経った今日でも、ジャングルの中、タガンタガン灌木の下にまだ無数の骨が眠っていると想像されるという。

## 昭南憲兵隊

### C級戦犯として

愛媛県 豊田隆淳

私の家は、周桑郡丹原町湯谷口の高野山真言宗安楽寺で、私は五十三代目の僧侶です。大正十四年八月九日、八人兄弟の末っ子ですが長男として生まれました。